

カフェ「ドロップ」での一夜

(音信不通 ⑨)

奈良 敏行



本屋の仕事で欠かせないものに「リモデリング」がある。細胞のつくり替えのようなものだ。個性を前面に出すゆえに、小商いにはぬぎがたい賞味期限がある。十年ともいわれる。他人の個性の最良な部分に触れて、上書きする機会がなければ、輝きが消える。

三月のある日、夜七時半の閉店後、「ドロップ」で、M・Sさん、S・Mさんに、自分がそろそろメタモルフオーゼする時期に入った、と打ち明けた。二人はいくつかの「発問」を設けてくれた。発問は問うことによって人を導く意図をもつ。その発問に向き合ってみた。

○本屋が嫌いになったことはありませんか？

ないです。嫌なことをみんな拒否していたら、辿りついたところが「本屋」だったからです。

○ズバリ本のどういうところが好きですか？

学ぶことが好きです。でも本以外に学びの手立てを知りませんし、本の遠心力の同心円上のなかでのみ人と出会い、そして自分が生かされつつづけています。

○どんなお客さんが来ると嬉しいですか？

自分とは違う角度で関心を示す人。何か面白がっている人。未知の楽しさを本に見出している人の発見を取り入れることで、いつも店が自分以上に保たれます。

○出版不況がいわれています。若い人たちが新しい書店をはじめていることについて思うことはありますか。

起業としての出店はとうに頭打ちだけど、情念による出店は途絶えることがないと耳にします。後先考えずやりた

いからやるといふのが情念です。書店特集の雑誌は一定数売れてます。そういうことのくり返しの中で、書店が輝いているからでしょう。そして残るものが残ります。店の個性よりも、人の個性が残るのではないでしょうか。情念から始まるのは、いまここにあるものでとりかかるといふ、ブリコラージュの力だと思えます。そしてオブセッションです。

○定有堂の読書会「読む会」の、テキストを選ぶ基準はなんですか。

入口は、『伝えたいこと』の中で語られる、「大きな声でものをいう人間を信用するな」「自分のあたまで考えろ」「本を読む」の3つのヒントです。選書係りの岩田直樹さんがいつもつながりのあるテキストを探されます。また、ここで会話されるようなあれこれを踏まえて、エッセイの連載をHP上に、月ごと連載されています。

毎年四月にはドラマリアさんが「岩田冊子」と称して紙本に一年分をとりまとめます。店頭無料配布です。

○奈良さんが読書するときに、お気に入りの場所やシチュエーションがあれば教えてください。

喫茶店やカフェです。あちこち居場所をかえないと落ち着きません。いつもいる「ここ」でない空間が必要なんですよ。ね。何かを払い捨てないと集中できない気質のようです。本屋的人間のひとつとして、みなさんそうなんでは？

○九十才のおばあちゃんにおすすめする本は？

問題は本の内容ではなく活字の大ききさではないでしょうか。

：自分の話が回りくどい、と最近しきりに反省する。なぜだろう、と思いつめぐらしたら、長く生きているので、そもそも齟齬にこだわりすぎる、と気づいた。自分の時間で参入することをやめ、目の前の人の時間に自然にスーと入っていったらいいな、と願う。そんなリモデリングへの一夜だった。

2017.3.27

(参考)

浜崎洋三 『伝えたいこと』 定有堂書店 1998